パストラル

植山周一郎

パストラル

植田郁

角川書店

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

パストラル

植山周一郎

1989年6月30日　初版発行

発行者　角川春樹

発行所　株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話（営業）03—817—8521
（編集）03—817—8451

〒102　振替　東京3-195208

印刷所　旭印刷株式会社

製本所　株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© Printed in Japan

ISBN4-04-872551-3　C0093

パストラル

装丁・本文イラスト／P・クラコカワー
装画／「AFTER DARK」1988 by P. Krakower
©ALL Copy-Right is reserved

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈主な登場人物〉

坂本純一……国際経営コンサルタント。アメリカの大手広告会社であるMJ広告社から依頼されて、日本の広告代理店、世界広告社との資本提携を手掛ける。

速水絵里香……アメリカの大手自動車会社、USモーターズの日本支社長アシスタント。ヨシダ自動車工業と提携関係にあるが、これを強化する交渉を担当。飛行機の中で偶然坂本純一に会い、恋に落ちる。日本人の父とアメリカ人の母を持つ魅力的なハーフ。

フリッツ・マイヤー……MJ広告社の国際担当筆頭副社長。

キャピー原山……世界広告社社長。カリフォルニア生まれの二世。

ビル・ロビンソン……USモーターズ社長。絵里香の良き理解者。

ジム・トンプソン……USモーターズ日本支社長。

吉田一男……ヨシダ自動車工業の創業者、社長。

吉田文雄……吉田一男の息子で、ヨシダ自動車工業の副社長。

USM・ヨシダ自動車　経営データ	USM	ヨシダ自動車
売り上げ	153億ドル（3兆600億円）	9500億円
純利益	11億ドル（2200億円；税引き）	90億円（1株あたり15円）
生産台数	107万台	75万台
うち乗用車	82万台	60万台
米国での売上げとシェア	120万台（7.7%）	20万台（1.3%）
輸出	2万台	51万台 （完成車45万台 K.D.6万台 輸出比率—68% 米国向け輸出枠 18万台（乗用車））
輸入	15万台 （ヨシダOEM 10万台 韓国 5万台）	
従業員	6万人	2万人
資本金	3億ドル（600億円）	300億円（6億株；額面50円）
提携関係	ヨシダ自動車（20%） 韓国金剛（10%） 英国PMC（25%） イタリアJMC（21%）	USM（1%） 韓国金剛（10%）

米国・日本自動車市場データ		乗用車	商用車	合計
アメリカ市場	生産	818万台	347万台	1165万台
	販売	1089万台	468万台	1557万台
	輸出	70万台	19万台	89万台
	輸入	439万台	125万台	564万台
	日本からの輸入	222万台	77万台	299万台
	日本への輸出	1816台	0台	1816万台
	日本メーカーの現地生産	18万台	11万台	29万台
	国内保有台数	1億3211万台	3958万台	1億7169万台
日本市場	生産	765万台	462万台	1227万台
	販売	310万台	245万台	555万台
	輸出（世界）	443万台	230万台	673万台
	輸入（世界から）	50172台	147台（1.6%）	50319台
	うちドイツから	40157台		
	アメリカから	1816台		
	国内保有台数	2784万台	1831万台	4615万台

世界ランキング（生産台数）

1	GM	643万台	（内乗用車、489万台）
2	トヨタ	367万台	（257万台）
3	FORD	285万台	（164万台）
4	日産	250万台	（186万台）
5	VW	182万台	（174万台）
6	ルノー	154万台	（132万台）
7	クライスラー	148万台	（127万台）
8	フィアット	135万台	（120万台）
9	マツダ	119万台	（82万台）
10	三菱	115万台	（57万台）
11	ホンダ	112万台	（96万台）
12	USM	107万台	（82万台）
16	**ヨシダ自動車**	**75万台**	**（60万台）**

メーカー別シェア（販売実績）

アメリカ市場　乗用車（合計1104万台）商業車（468万台）

1	GM	461万台（41.7%）	165万台（35%）
2	FORD	207万台（18.7%）	127万台（27%）
3	クライスラー	114万台（10.3%）	54万台（11%）
4	USM	95万台（ 8.6%）	25万台（ 5%）
5	トヨタ	62万台（ 5.6%）	33万台（ 7%）
6	日産	57万台（ 5.2%）	うち現地生産4万台
7	ホンダ	55万台（ 5.0%）	うち現地生産146,000台
X	**ヨシダ自動車**	**18万台**（ 1.6%）	**2万台**（0.4%）
	（USMブランド10万台）		

日本市場　乗用車294万台　合計555万台

1	トヨタ	132万台	168万台（30.3%）
2	日産	78万台	105万台（18.8%）
3	ホンダ	30万台	45万台（ 8.2%）
4	マツダ	19万台	35万台（ 6.2%）
X	**ヨシダ**	**25万台**	**30万台**（ 5.4%）

株価（1985年末）

日産	569円	29.7円（1株当たり利益）
いすゞ	400円	16.4円
トヨタ	1100円	95.7円
マツダ	385円	8.6円（前期は、33.5円）
ホンダ	1100円	45.0円
鈴木	500円	20.7円
ヨシダ(推定)	**4～500円**	**15.0円**

メーカー別米国輸出自主規制枠

トヨタ	617,000
日産	545,000
ホンダ	427,000
マツダ	227,000
ヨシダ	**180,000**
その他	
合計	2,300,000

ＭＪ・世界広告社経営データ

	ＭＪ	世界広告社
扱い高	30億ドル（6000億円）	580億円
純利益	8000万ドル（16億万円）	8億円
資本金	1000万ドル（20億円）	2億5000万円 （額面50円×500万株）
ランキング	世界第五位	日本第九位
主なクライアント	ＵＳＭ	日産自動車
	トロピカル・コーラ	チャーミー化粧品
	テキサス・ビール	ヒーロー電気
	ビーナス航空	ＡＢＭコンピュータ
	バージニア煙草	新日本たばこ
	Ｐ＆Ａ（洗剤、歯磨き）	コスモカメラ
支店網	全世界40か国	連絡事務所・ＮＹ

1985年　世界の広告会社ランキング

（単位：百万ドル）

順位	会社名	国籍	取扱利益	取扱高
1	Young & Rubicam	米国	536.0	3,580.0
2	Ogilvy Group	米国	481.1	3,320.0
3	電通	日本	473.1	3,620.0
4	Ted Bates Worldwide	米国	466.0	3,110.0
5	**ＭＪ**	**米国**	**455.0**	**3,100.0**
6	J. Walter Thompson Co.	米国	450.9	3,010.0
7	Saatchi & Saatchi	英国	440.9	3,030.0
8	BBDO International	米国	377.0	2,520.0
9	McCann-Erickson Worldwide	米国	345.2	2,300.0
10	D'Arcy Masius Benton & Bowles	米国	319.5	2,180.0

1985年　日本の広告会社ランキング

順位	会社名	取扱高
1	電通	8195億円
2	博報堂	3317億円
3	大広	1196億円
4	東急エージェンシー	1092億円
5	第一企画	634億円
6	読売広告社	629億円
7	旭通信社	612億円
8	**世界広告社**	**580億円**
9	マッキャン・エリクソン博報堂	532億円
10	朝日広告社	477億円

※このデータは全て1985年度の自動車産業、広告産業の実状に基づき、小説に登場する架空の企業を加えたものです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第一章

一九八六年二月二十八日金曜日は鉛のような曇天で、底冷えがする日だった。坂本純一は世田谷区成城の自宅で妻の由里子とブランチをとっていた。近所の寿司政から取った上寿司だ。しばしのアメリカ出張だからということで、由里子が気を利かせて、純一のお気に入りの寿司を注文したのだ。

短波ラジオからは前場の株式市場の引け値が流れてくる。円高が進み、ハイテク株が売られ、電力株が買われている。

「下着はパンツとTシャツが五枚ずつ。ワイシャツも白のとブルーのストライプのと全部で五枚。ソックスも多めに入れておいたし、一週間の出張だからこれでいいわね」

由里子が、まるで大阪に出張する亭主を送りだすように言う。国際経営コンサルタントの坂本はほとんど毎月海外出張するから、荷造りは当日手際よく由里子がやるのだ。彼女は賢く、昔から気の利く女だった。

MJ広告社の資料から目を離して、純一は由里子の顔を見た。彼女の真ん丸い黒縁の眼鏡の向こうの目尻のしわが気になった。

〈由里子ももう三十八か。初めて会った頃は美しい女だった。エコー電気の外国部長の紹介で、見合いをした頃、彼女はまだ聖心女学院を卒業したばかりの箱入り娘だった。それからもう十三年か。

俺たちの関係って一体何なのだ。ニュートラルな関係とでもいうやつかな。好きでもないし、嫌いでもない。飯も作ってくれるし、家もきれいにしておいてくれる。

セックスも俺が求めれば応じてくれる。でも、なんとなくお互いにパッションを感じない。子供は男と女が一人ずつ。きれいな家もあるし、車も俺のBMWと彼女のシビックがある。食うには困らない。これが世間でいう『幸せな結婚』か〉

「ああ、それでいい。それからカリフォルニアでゴルフをやるかもしれないから、ゴルフシューズ。それとリーボックも入れておいてくれ」

「もう入ってますよ、いつものことですから。セーター、ジョギングパンツ、水泳パンツも入れましたよ」

坂本は海外出張のときも毎朝のジョギングを欠かさないようにしているし、ホテルにプールがあれば泳ぐようにしている。

「それから背広は今回はチャコールグレーの上下と濃紺のブレザーの二着だけでいい。ネクタイは四本。グッチのストライプのとエルメスの花柄のやつ忘れるなよ」

「はい、はい」

〈由里子は、ボーッとしているように見せているけれど、本当は聡明な女だ。もしかしたら俺より上手かもしれない。今まで何度か浮気もしてきたが、それが彼女にばれたことはない。と

いうよりも、俺の浮気性を分かっていて、見てみない振りをしているのかもしれない。二人の子供の面倒や教育もきちんとやっている、申し分のない母親だ。

だから逆に、しょっちゅう一緒にいると、息が詰まるような気になるのだ。まあ、こうやって俺がしょっちゅう海外出張をしているから、この結婚も何とか保っているんだな。それじゃなきゃとてもやり切れないものな。

もっとも向こうも同じように考えているかもしれない。俺が海外出張に出発する日はやけにこいつの表情が明るい〉

「俺がいないと清々していていいだろう」

「いいえ、大切な旦那様がいないで寂しいわ」

由里子は純一をからかうように言って笑った。

「おまえは俺の留守中は何をやって時間をつぶしているんだ」

「修治の受験勉強や慧のピアノでもう大変。それに外人に日本語を教え始めたし。それから、今週は、お父様に伊勢丹で新しいドレスを買ってもらうことになっているわ」

〈やれやれ、またお父様だ。でも考えてみれば、この成城の家だって隣に住んでいる彼女の父親、林義郎氏の敷地の一角に建てさせてもらったのだから、俺も文句をいえた義理ではない〉

「だから一週間やることがいっぱい。あなたも海外出張っていったってずっと働いているわけではないんでしょう。ゴルフやったり、飲んだり、ミュージカルを見たり、いいわね。私なんかこの成城村でうろうろしているだけ。だからお土産買ってきて。シャネルのバッグなんかいいわ」

〈カーラーをくっつけてシャネルのバッグもあるまい。でもまあいい。それで家庭安泰だったら。この平和な状態を俺も壊すつもりはないのだから〉

ドアのチャイムが鳴って、東京交通の運転手が到着した。いつもの田中だ。

「坂本さん、お荷物はこの三つだけですか。先にトランクに入れておきます」

「ああ、頼む」

坂本は、MJ広告社の書類やパスポート、カメラ、レコーディング・ウォークマンとお気に入りの音楽テープ数巻、電子手帳、航空券、トラベラーズチェックなどの貴重な小物を大きめのフライトケースに入れ、靴に足を突っ込んだ。

「ああ、まだ磨いてないから、ちょっと待って」

由里子があわててバリーのブーツにブラシを掛けた。彼女がそうするのを上からしばしつっ立ったまま坂本は見ていた。ところどころに白髪が混じっている。突然由里子のことが可哀想になった。

〈これではまるでお手伝いさんの生活と変わらないな。やっぱりシャネルのバッグは買ってきてやろう〉

「エイズのお土産だけはノーサンキューよ。行ってらっしゃーい」

そう明るく言う由里子の頬に形ばかりのキッスをすると、坂本はハイヤーに乗った。赤煉瓦の壁の向こうに二階の自分の書斎が見える。その窓の近くの紅葉の枝が寒そうに震えている。

車が動きだすと、運転手の田中が話しかける。気さくな男で坂本は気に入っていた。

「坂本さん、今日も軽装ですね。さすが旅慣れているっていう感じですね。革ジャンにセータ

ーに革のズボンなんて若いですよ。今日はどちらまで」
飛行機に乗るとき坂本はいつもラフな服装だった。これのほうが機内で熟睡できるからだ。
「ニューヨークさ。でも今日のフライトはサンフランシスコまで。週末を西海岸でのんびりして、時差を取ってから月曜日にニューヨークに行く予定だよ」
「フライトは何時ですか」
「三時五十五分発のUA820便だから、二時半ぐらいまでには成田に着きたいね」
「今十二時ですから安全を見て都心を外れて、世田谷通りから環七を下って大井から湾岸道路で行きます」
「ああ、そうしてくれ」
坂本は読みかけていたMJ広告社の書類をもう一度開いた。
坂本純一。四十歳。国際経営コンサルタント。外資系企業の日本進出のコンサルティングが主なビジネス。以前は日本の大手家電企業のエコー電気のサラリーマン。海外駐在員としてロンドンに八年滞在し、エコー本社に帰任したが、一年前に独立。現在、坂本国際経営事務所の社長。
MJ広告社は、世界第五位の広告代理店で、本社はニューヨークにある。坂本が英国エコーで販売部長をしていた頃、英国MJ広告社がイギリスにおけるエコーの広告を扱っていた。つまり坂本がMJ広告社のクライアント（顧客）だったわけだ。
フリッツ・マイヤーは当時ドイツのMJ広告社の副社長とニューヨークのMJ本社の国際担当副社長を兼務していた国際派のドイツ人ビジネスマンだった。

国際的に知名度の高いエコー電気のイギリスの子会社の販売部長である坂本は、MJ広告社にとっては大切なクライアントであった。だから坂本が商用でニューヨークのエコー・アメリカを訪れた時は、フリッツ・マイヤーは大歓待した。

世界の大手広告代理店が集まるマジソン街にあるMJ広告社の本社ビルに坂本を招待し、最近のアメリカのテレビコマーシャルを見せ、マーケティング環境を説明した。かすかにドイツなまりが残っている英語で理路整然と話すが、広告マン独特のスマイルは絶やさない。濃紺のピンストライプの背広に地味めのミラショーンのネクタイ。火はとっくに消えたままのダンヒルのパイプを口にくわえていた。

坂本とマイヤーはすぐに意気投合した。坂本が大学時代にドイツに一年留学していたこともあって、彼らは時々ドイツ語を混じえて話した。これが坂本とフリッツ・マイヤーの初めての出会いだった。

八年間の英国滞在の後、坂本はエコー電気の東京の本社に帰任した。一九八三年の春のことだった。三十七歳だったが、英国での業績が認められて課長職として迎えられ、オーディオ製品のプロダクト・プラニング担当となった。

そして六か月後には広告部次長に昇進し、年間広告予算百億円を牛耳る立場に立った。これは異例な抜擢だったが、英国エコーで販売企画部長と販売推進部長を兼務し、邦貨にして約五百億円の売上げの企業を牛耳っていた坂本にはもの足りなかった。

『歯車の一つ』という実感がひしひしとして、抜擢にもかかわらず、彼の心は晴れなかった。それにイギリスで自由な生活をしていた由里子も日本での堅苦しい生活、狭い住環境などに少

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com